

家畜衛生だより

牛ウイルス性下痢(BVD)の バルク乳検査を実施します！

埼玉県でも
摘発事例あり

今年度も、牛ウイルス性下痢の持続感染牛(PI牛)を早期に発見するため、県内の酪農家を対象にBVDのバルク乳スクリーニング検査を実施します(無料)。

1. 検査日程: 10月、3月
2. 検査材料: バルク乳
(原則、クーラーステーションで採材)
3. 検査方法: 遺伝子検査



© 2020 Japan Dairy Council

➤ BVDってどんな病気？

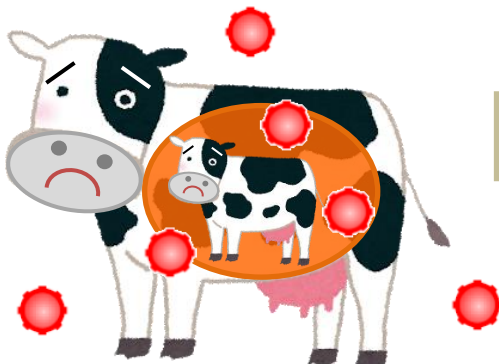
BVDウイルスの感染による牛の病気です。感染すると下痢や発熱、呼吸器症状などを起こしますが、通常一週間程度で回復します。

妊娠牛がBVDウイルスに感染すると、胎盤を介して胎子も感染し、胎齢により流産や先天異常が起こります。

➤ PI牛ってなに？

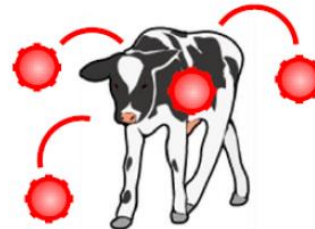
妊娠牛が胎齢約 18～125 日で感染したとき、胎子の免疫機構が出来上がっていないため、ウイルスを排除することができず、ウイルスと共存したままPI牛(持続感染牛)として生まれる場合があります。

胎齢約 18～125 日で感染



分娩後

気づかぬうちに
農場や取引先にまん延



PI牛の摘発・淘汰
母牛は、回復し健康

➤ 何が問題なの？

PI牛は、生涯にわたって糞尿や鼻汁から大量のウイルスを排出し続け、他の牛に感染させます。新たにPI牛が生まれてくる可能性があるため、牧場は汚染され続けます。

PI牛の子は必ずPI牛になります。またPI牛に対する治療方法はありません。

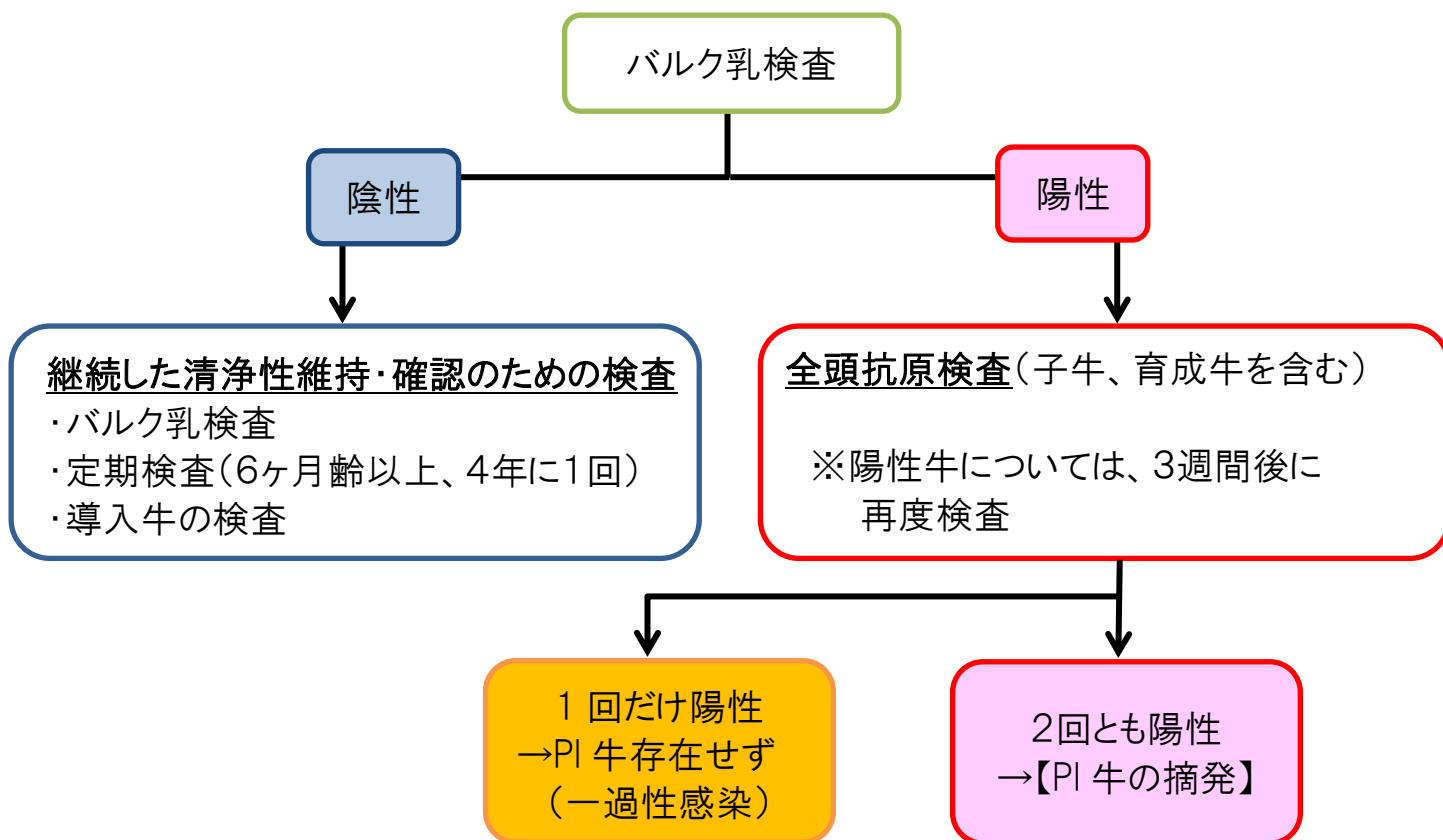
➤ どうしたらいいの？

農場内にPI牛がいないか検査をしましょう。埼玉県では、年2回のバルク乳検査の他、令和3年度から定期検査として4年に1回全頭検査を実施しています。外部から牛を導入する場合、ワクチン履歴を確認し、接種歴がなければ検査をすることをお勧めします。

ワクチンを接種して感染を予防しましょう。BVD ワクチンは、生ワクチンと不活化ワクチンがあります。生ワクチンは妊娠時期に接種すると胎子がPI牛になってしまう可能性があるので、妊娠牛には不活化ワクチンを使用しましょう。

➤ もし、バルク乳検査で陽性になったら？

バルク乳検査で陽性になった場合は、PI牛を摘発する必要があります。PI牛摘発の流れは、以下のとおりです。



* 摘発したPI牛は、自主的とう汰を実施する。

*PI牛の自主的とう汰以降、10か月間に生まれた新生子牛は抗原検査を実施する。

*ご不明な点については、川越家畜保健衛生所までご連絡ください。